

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00311

研究課題名（和文）戦後日本における戦時上海邦人文芸文化ネットワークの移植と展開

研究課題名（英文）After the war, transplanting and developing the cultural network of Japanese expatriates in wartime Shanghai in post-war Japan.

研究代表者

木田 隆文（Kida, Takafumi）

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：80440882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦時下の上海および中支各都市で活動した日本文学者・文学団体の人的ネットワークが、戦後日本の文芸文化の創成と展開に与えた影響を検討するものである。研究では特に戦時上海および戦後日本の詩壇形成の中心的役割を果たした詩人・池田克己に注目し、その戦時上海・戦後日本での活動を跡付ける基礎資料の整備と分析を行った。その成果としてまず『上海文学』（全五冊）、『古川武雄宛池田克己書簡』（全60通）などの基礎資料の発掘・復刻を実現した。また併せて展覧「幻の日本語文学 池田克己との時代」と関連の国際シンポジウムを招聘、当該分野の新資料と研究成果を広く国内外に報告し、研究成果の国際的な周知にも努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外地文学、特に戦時中国の日本語文学の解明は近年大きく進展した。だが外地文学と戦後日本文学との関係性は、これまであまり検討されることがなかった。そうした研究状況を受け、本研究は戦時中国・戦後日本にわたって活動した文学者の活動実態の確認を試み、戦中戦後を通じて極東アジア全域に広がった日本語文芸文化のネットワークの一端を解明した。その調査過程においては、外地文芸雑誌や関係者書簡などの新出資料を複数発見・公開し、研究基盤の整備にも寄与することができた。本研究の成果は、戦後日本文学を東アジア近代史の中に再配置する視点を開くとともに、外地文学研究全体のさらなる進展にも寄与するであろう。

研究成果の概要（英文）：This research examines the impact of the personal networks of Japanese literary scholars and literary groups who operated in wartime Shanghai and various cities in China on the creation and development of postwar Japanese literary culture. The study specifically focuses on the poet Katsumi Ikeda, who played a central role in shaping the literary scene in wartime Shanghai and postwar Japan, and conducts the compilation and analysis of foundational materials tracing his activities during wartime Shanghai to postwar Japan. As a result, foundational materials such as "Shanghai Literature" and "Letters from Katsumi Ikeda to Takeo Furukawa" were excavated and reprinted. Additionally, an exhibition titled "The Phantom Japanese Literature - Era II with Katsumi Ikeda" and an associated international symposium were held to widely disseminate new materials and research findings in this field domestically and internationally, striving for the international recognition of the research outcomes.

研究分野：日本近代文学

キーワード：外地文学 戦後文学 上海文学研究会 日本未来派 池田克己 戦時中国 現代詩

## 1. 研究開始当初の背景

戦時上海における日本語文学の研究は、近年、現地のメディア・文化状況に関する実態解明に大きな関心を寄せてきた。その中心となった大橋毅彦は、科学研究費基盤(B)「戦時上海の文芸文化と邦字新聞「大陸新報」に関する多角的研究」(平成19~21年度)を率い、申請者を含む複数の研究者とともに『新聞で見る戦時上海の文化総覧「大陸新報」文芸文化記事細目』(2012・5、ゆまに書房)を編纂した。またそれに触発されるように、和田博文が『共同研究 上海の日本人社会とメディア』(2014・10、岩波書店)を刊行。他方で竹松良明を中心とした基盤(B)「中日文化協会上海分会と関連文学者・文化人に関する基礎的・総合的研究」(平成25~27年度)は、現地の日本側文化政策機関である中日文化協会の活動実態の解明をすすめるなど、戦時上海の文学とメディア環境の解明が加速度的に進歩した。そして2017年には、これまでの研究史を総括したともいふべき大橋毅彦『昭和文学の上海体験』(2017・3、勉誠出版)が上梓され、上海における日本語文学研究の現状と水準が概観できる状況となった。

これらの先行研究は、旧来の表象研究に偏った研究的視点の転換と、戦時上海の日本語文学状況を実証的に検討する多くの資料の発掘整備をもたらした。しかしいづれも、1945年の日本敗戦を一つの区切りとし、それ以後の文学状況を射程に収めてこなかったという問題も孕んでいる。1945年8月の敗戦を機に日本の上海統治は終焉を迎える。しかし、敗戦前後の上海に居留した武田泰淳が、帰国後その経験をもとに本格的な作家活動を開始したように、戦時上海と戦後日本の文学状況はある一定の連続性を有していたはずである。

筆者はこれまで、上記大橋・竹松の科研に共同研究者として参加し、大陸新報社や中日文化協会といった言論文化統治機関と、上海文学研究会をはじめとする上海現地文学者の間で交わされた文化政策の力学に対する調査を行ってきた。また基盤(C)「日本統治下上海を中心とした中支各地域における日本語文学状況の基礎的研究」(平成25~27年度)同「汪兆銘政権勢力下における日本語文学状況の基礎的・発展的研究」(平成28~30年度)の研究代表者として、日本統治下の上海および長江流域で活動した邦人文学者・文学団体の実態と、各都市間での人的・文化的交渉の様態を明らかにした。そしてその検討過程で、戦時上海および中支各都市で形成された文学・文化人のネットワークが、戦後日本の文芸文化活動に多彩な影響を与えた事例をいくつも見出すに至ったのである。

## 2. 研究の目的

そこで本課題は、上海および中支各都市に存在した文芸文化とその人的ネットワークが、戦後日本の文学・文化状況にもたらした影響を検証することを目標とする。そしてそれを具体的に検討するために、池田克己という詩人を座標軸に設定した。

池田克己は昭和10年に詩誌『豚』を発行、戦後も『日本未来派』を主宰し、モダニズム詩の文脈で一定の評価を得た人物として知られている。しかしこれまでの申請者の調査によって、彼が戦時上海で結成された上海文学研究会の実質的な編集責任者として活動し、蘇州で活動していた黒木清次ら中支各地域の邦人文学者を糾合する動きを見せていたこと、さらには南京国民政府(汪兆銘政権)の宣伝部顧問であった草野心平とも接触を持ち、彼の右腕として参加した第3回大東亜文学者大会(南京大会)では高見順ら内地作家とも親交を深めていたことが判明した。そしてその上海で池田が築いた人脈は、戦後『日本未来派』において再結集され、同誌は戦後詩の一つの潮流を作り上げていった。

つまり池田克己は、戦時上海から戦後日本を股にかけた文学プロデューサーであり、その彼らを軸とした人物・団体の活動をj確認してゆくことは、戦時上海と戦後日本の連続関係、さらには戦時上海の文学/文化状況を、複合的にあぶりだすことになる。そしてそれは、戦前/戦後、中国/日本を切断した形で捉えることの多かった戦時上海の日本語文学研究に転換をもたらすだけでない。文学団体・文化団体双方の中心人物とその活動を交錯させながら検討する本研究は、戦時上海の文学状況を戦後文学や周辺文化領域との総合的な視点からとらえ返すことにもなり、文学史的な枠組みの再検討はもちろん、外地研究全体の進展にも寄与することが期待されるであろう。

上記のような狙いをふまえ、本課題では戦時上海/戦後日本の文芸文化活動の実態を、以下3点の検討手順に沿って解明することにした。

池田克己を軸とする上海文学研究会 日本未来派間の関係者の移動と交流の実態確認  
戦後日本における日本未来派関係者の他文芸団体・他文化領域への接触・展開の検討  
各関係者・関係団体における、戦前 戦後の言説的連続性の検討

本研究がこうした手順を選択したのは、池田をめぐる評伝的確認や単なる資料整備・事実確認だけを目指とせず、戦時上海から戦後日本にまたがる人的・文化的なネットワークの実態と、その影響関係をあぶり出すことに力点を置いたからである。

## 3. 研究の方法

本研究の申請時における研究期間は2019年度から3年間の予定であった。またその研究の柱は、

上海図書館・北京国家図書館をはじめとする中国主要図書館での文献調査を軸としていた。しかし、研究開始時期と同時に世界的なコロナ禍に陥り、海外調査の実施が困難となった。また同じく国内諸機関の文献調査も予定通りに遂行することが困難となった。

そのため、研究開始当初から大きくその予定を変更し、調査の方針を、既存の収集資料の再検討、国内図書館資料の再調査、古書市場・個人蔵書からの資料発掘、の3つを軸とする形に大きく変更した。またコロナ禍の影響で研究遂行に大幅な遅延が生じたこともあり、研究期間を当初の3年間から5年間（2019-2023年度）へと延長し、研究の充実をはかった。

以上のような変更を踏まえ、次に示す手順と方法で研究を推進した。

\*

**2019年度：** 研究初年度は、研究基盤の確立と次年度以後の研究を具体的に進展させる基礎調査として、研究の軸となる池田克己の文献情報の探索・整理と、それに基づく人的・文化的ネットワークの確認に比重を置いた。まずは池田の上海時代の人脈と文化活動を、『大陸新報』などの現地媒体や、過去に収集済みの上海文学研究会関連資料から抽出した。次いで戦後の池田の活動と人脈を、池田が戦後日本で刊行した詩誌『花』・『日本未来派』の分析から検討し、それ等を統合する形で、池田克己を軸とした戦時上海と戦後日本の文化人・団体の概要の把握に努めた。

**2020年度：** 2年目は戦時上海およびその周辺都市の日本語文学状況の確認に注力すべく、上海文学研究会と関係を有した人物・周辺団体に関する調査を実施した。特に池田克己が南京で接触した草野心平に注目し、池田・草野が共同で創刊した『亜細亜』や、草野が創刊し、南京居留の日本人文学者が結集した『黄鳥』などの分析を進めた。また年度後半には人的移動の制限が緩和されたことに伴い、国内図書館での文献調査・収集を開始し、また池田の遺族・関係者への聞き取り調査も実施した。

**2021年度：** 当初計画では、3年目は日本未来派の活動の分析に焦点を当て、前年に検討した戦時中国の文芸状況との連続性を検討する予定であった。しかし6月に上海文学研究会の機関誌『上海文学』第2号を発見し、それにより同誌の全貌が確認できることになった。そこで改めて同誌の総合的検討を実施し、池田と上海文学研究会を軸とした戦時上海の邦人文学空間の実態解明に取り組んだ。また同時に、他科研究および中国側研究者との連携のもと、日中双方で互恵的に資料収集を実施できる体制を整え、在華文献資料の収集にも取り組んだ。

**2022年度：** 4年目は、日本未来派の人的ネットワークと活動の解明に焦点を当てた。特に本研究によって発掘した新資料「古川武雄宛池田克己書簡」の分析を通じて、戦時中国で活動した日本人文学者の戦後日本での動向を整理し、戦後日本詩壇における大陸文芸文化の影響を検討した。また併せて池田が豚詩社を拠点に生み出した戦前期関西詩人の戦後の活動にも注目し、池田克己を軸とした戦前内地・戦時中国・戦後日本の文芸文化ネットワークの様態の解明を行った。なお同年は前年度に発掘した『上海文学』の復刻出版作業にも取り組み、今後の当該分野の研究基盤の整備も図った。

**2023年度：** 研究最終年度は研究成果の集約と公開を実施し、研究の総合的完成を目指した。具体的には本研究の過程で発掘した資料と研究成果をまとめた単著『日本未来派、そして戦後詩の胎動「古川武雄宛池田克己書簡」翻刻・注解／詩誌『花』復刻版』を刊行した。また研究遂行過程で収集した文献・資料については、博物館展示「幻の大陸日本語文学 池田克己とその時代」を企画・開催し、その存在と研究的価値を学会および社会に広く公開した。さらに他科研究プロジェクト「戦時下の北京・上海及び周辺都市における日本語出版物と文芸文化ネットワークの研究」(21KK0007)とともに国際シンポジウムを開催し、本研究の学際的連携を図った。

#### 4. 研究成果

以上のような計画を遂行した結果、(1)文献探索を軸とした研究基盤整備と、(2)その研究報告で、複数の成果を挙げる事ができた。以下にその概要を示しておく。

\*

##### (1) 文献資料の調査・収集と研究基盤整備

本研究の基盤を形成する文献調査・収集については、コロナ禍の行動制限が大きく響き、当初予定の通りには行かない面があった。それでも日本近代文学館や日本現代詩歌文学館などの国内主要図書館の調査からは、日本未来派をはじめとする戦後詩関連の基礎資料を多数収集することができた。その中でも、特にガリ版雑誌『花』は、池田克己が戦時上海で主宰した『上海文学』と戦後日本で主宰した『日本未来派』の間をつなぐミッシング・リンクともいえるべき雑誌であり、池田の大陸人脈の戦後の再編成を確認するうえで大きな役割を果たすものとなった。

また国内文献調査に際しては、池田が戦前に創作出版活動を行った関西と、日本未来派が印刷出版の拠点を置いた北海道を主要調査地点として設定した。前者からは池田が結成した豚詩社やその周辺にあった関西詩人の動向をうかがわせる詩誌を、後者からは『木星』・『至上律』など、初期日本未来派の運営に大きな影響をもたらした同人たちの活動を示す資料を多数収集することができ、日本未来派が戦前から戦後、外地から日本各地に至る幅広い詩人ネットワークの結節点として成立していたことを浮き彫りにした。

さらに国内での資料収集に際しては、上記のような公的機関の所蔵資料だけでなく、遺族等、関係者の保有する文献の所在確認と、古書市場に保有される文献の探索・収集にも力を入れた。関係者調査の成果としてまず特筆すべきは、池田克己遺族の元に保管されていた日記の発見である。分量としてはさほど多くないものの、日本未来派およびその周辺に集った文学者や文化人

の足跡が記されており、戦後詩壇の動向を知る資料として貴重なものと言える。また上海文学研究会の同人であった兼松信夫遺族の元からは、『大陸詩集』手沢本や雑誌、書簡などを見出すことができ、上海文学研究会同人の上海から戦後の動向を知る手がかりを得ることになった。古書市場の探索において重要な発見となったものは、まず『上海文学』第2号が挙げられる。池田克己が編集の実質を担った同誌は、戦時上海の文芸文化の実態を示す資料として知られていたが、第2号は未発見であった。その発見による全容の解明は、本研究課題はもちろん、戦時上海および中支各地の文芸状況の解明に大きく弾みをつけるものとなった。また同じく古書市場の調査から発掘できた「古川武雄宛池田克己書簡」(1947~52年、60通)は、池田克己が日本未来派の経営と印刷発行を担った古川武雄に宛てた書簡群で、日本未来派の発足前後から発展期の事情や人的交流の実態が克明に記されていることはもちろん、戦後詩壇の形成過程までもが読み取れる重要資料である。本資料の発見によって、本研究課題である戦時上海 戦後日本の文化的連続性と文学的ネットワークの解明は劇的に進んだ。さらにそればかりではなく、同書簡には敗戦後の文芸書の印刷出版・流通事情に関する記述も多数記載されており、書誌学・メディア学的な研究領域にも示唆を与える資料が提示できた。

なお補足であるが、申請段階において目標としていた中国での文献調査については、コロナ禍の影響により一度も実現することができなかった。しかしその一方、移動制限の影響で急速に普及したZoomや騰訊会議などのWeb会議システムに助けられ、これまで以上に中国側研究者との綿密な連絡が実現することにもなった。そこで本研究と協力関係にある在華日中文学資料研究会の日中研究者を中心に、日中いずれかに存在する資料を分担して収集・提供する方法を打ち立てた。それにより本研究においても外地関連文献の入手が可能になった。偶発的なものとはいえ、今回確立された日中間の研究協力体制は今後の研究活動に際しても有益であろうし、さらなる国際連携研究の推進にも大きく寄与することが期待されるであろう。

## (2) 研究成果報告

上記のような研究基盤整備によってもたらされた資料と研究的知見は、次に示す成果として学会および社会に向けて広く公開した。

### 書籍・論文

本研究では、新発見を含む多くの資料を発掘・収集した。そのうち特に研究的価値の高いものを以下2冊の書籍として刊行した。

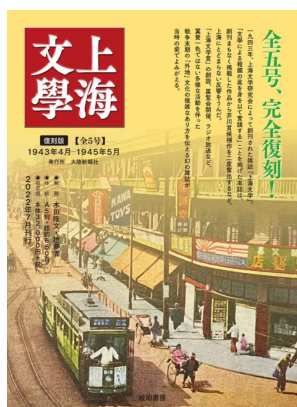
#### 1) 木田隆文・趙夢雲編著『上海文学 復刻版』(2022年7月、琥珀書房) [図版]

報告者は以前より『上海文学』の研究的価値に注目し、その収集と調査研究に取り組んできた。上記(1)-2も示したように、本研究の過程でこれまで未発見であった第2号が見出され、同誌の全貌が確認されるに至った。本書はその『上海文学』全5号を復刻したもので、資料編として別冊を付した。その別冊に掲載した論文「よみがえる大陸文壇 池田克己と上海文学研究会」で、池田克己を軸とした戦時上海の文芸文化ネットワークの解明と、その戦後の詩壇に与えた影響の可能性を指摘した。

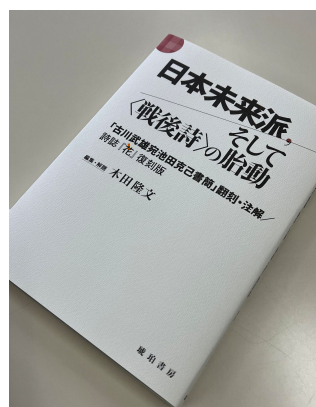
#### 2) 木田隆文編著『日本未来派、そして 戦後詩 の胎動 「古川武雄宛池田克己書簡」翻刻・注解/詩誌『花』復刻版』(2024年3月、琥珀書房) [図版]

本書は本研究の過程で収集し得た「古川武雄宛池田克己書簡」および詩誌『花』の翻刻・復刻を行ったものである。両資料に対する解題を付し、また特に「書簡」については書簡の翻刻と、その内容に対する注解を施すことで、日本未来派に結集した戦前期関西と戦時上海の文学者の動向と、戦後詩壇黎明期の状況に関する情報を提示できるようにした。また同書には両資料の調査研究成果として「戦後詩の太陽系 『花』・「古川武雄宛池田克己書簡」解題」を掲載し、そこで本研究課題の総括も行った。

その他研究課題において得られた知見は、『昭和文学研究』等の雑誌でも報告した。



〔図版1〕『上海文学 復刻版』  
出版案内



〔図版2〕『日本未来派、そして  
戦後詩 の胎動』書影



## 学会発表およびシンポジウムの開催

研究過程において得られた知見は随時学会や研究会等で発表を行った。特に研究年度後半は、筆者も参加する国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「戦時下の北京・上海及び周辺都市における日本語出版物と文芸文化ネットワークの研究」(代表・大橋毅彦、21KK0007)が主催する研究会や国際シンポジウムの場で報告を実施し、中国側研究者との研究的視点や情報の共有を行った。また特に研究最終年度は池田克己没後70年に当たることもあり、市民講演会等を通じて、市民社会一般に広く関心を誘発する取り組みも意識した。

## 博物館展示の企画・運営

本研究は新資料を含む多くの貴重書籍を発掘収集したが、それらの現物資料は、筆者が企画運営を行った展覧「幻の大陸日本語文学 池田克己とその時代」(2024年1月22日~4月27日、於・奈良大学博物館)において公開した〔図版〕。同展覧は戦前内地 戦時中国 戦後日本にわたる池田克己の文学活動を、戦時中国で刊行された日本語文学関連資料と共に紹介するものである。展示に際しては解説パンフレットを作成し、まず展示資料には詳細な書誌的解題を付し、外地日本語文学研究の文献カタログにもなることを目指したが、同時に研究成果を広く一般社会に還元するためにも、池田の事績や研究的意義の説明部分では平易な解説を意識した。加えて展示開催期間中には、同じ奈良大学に国際シンポジウム「戦前戦中における日本文化人の大陸表象とそのひろがり 絵画・書簡・新聞」を招聘し、展示紹介を兼ねた基調講演を行った。こうした試みを通じ、これまでの研究成果とその意義を、学会、市民社会、そして国際的に訴求することにも努めた。



〔図版〕「幻の大陸日本語文学」展ポスター

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木田隆文	4. 巻 87
2. 論文標題 『上海文学 復刻版』と戦時中国の日本語文学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 202-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 木田隆文	4. 巻 -
2. 論文標題 よみがえる大陸文壇 池田克己と上海文学研究会	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上海文学 復刻版	6. 最初と最後の頁 29-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木田隆文	4. 巻 -
2. 論文標題 旅順 帝国の 聖地	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国の都市の歴史的記憶 一九世紀後半～二〇世紀前半の日本語表象	6. 最初と最後の頁 98-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 木田隆文	4. 巻 44
2. 論文標題 奈良の風景25 吉野 現代詩の源流	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Imajin21	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木田隆文	4. 巻 49146
2. 論文標題 「上海文学」光と影の出版史	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本経済新聞	6. 最初と最後の頁 36-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木田隆文	4. 巻 49
2. 論文標題 『武漢歌人』・『武漢文学会雑誌 武漢文化』 解題および細目	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 166-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木田隆文	4. 巻 66
2. 論文標題 武漢居留民社会の日本語文学 武漢文学会・武漢歌話会の動向から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國文學論叢	6. 最初と最後の頁 102-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 基調講演 戦時中国における日本語文芸文化の ひろがり 展覧「幻の大陸日本語文学 池田克己とその時代」の紹介から
3. 学会等名 国際シンポジウム 戦前戦中における日本文化人の大陸表象とそのひろがり 絵画・書簡・新聞（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 日本現代詩の先駆け 池田克己
3. 学会等名 池田克己没後70年記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 帝国を巡礼する 聖地 旅順の観光とその表象
3. 学会等名 国際共同研究シンポジウム 近代日本の中国都市体験（2） 旅行案内・旅順・大連・北京（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 外地文芸文化資料の保存と共有 地理情報システム援用による「集合知」の可能性と課題
3. 学会等名 ワークショップ・東アジアにおける日本近代文学の越境（清華大学・在華日中文学資料研究会共催）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 海の彼方の日本語文学
3. 学会等名 奈良大学学友会関東支部（招待講演）
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 映画の都・奈良 あやめ池撮影所をめぐって
3. 学会等名 高の原カルチャーサロン 近代奈良の残像 文学と地理学から（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 汪兆銘政権下の日本語文学 『上海文学』とその周囲
3. 学会等名 第27回中国モダニズム研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 古川武雄（八森虎太郎）宛 池田克己書簡と戦後詩人のネットワーク
3. 学会等名 在華日中文学資料研究会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木田隆文
2. 発表標題 戦後日本における戦時上海文壇の継承と断絶 上海文学研究会から日本未来派へ
3. 学会等名 日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 木田隆文	4. 発行年 2024年
2. 出版社 琥珀書房	5. 総ページ数 380
3. 書名 日本未来派、そして 戦後詩 の胎動 「古川武雄宛池田克己書簡」翻刻・注解 / 詩誌『花』復刻版	

1. 著者名 木田隆文	4. 発行年 2024年
2. 出版社 奈良大学博物館	5. 総ページ数 13
3. 書名 幻の大陸日本語文学 池田克己とその時代	

1. 著者名 木田隆文、趙夢雲	4. 発行年 2022年
2. 出版社 琥珀書房	5. 総ページ数 660
3. 書名 『上海文学』復刻版	

1. 著者名 和田博文、王志松、高潔	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 中国の都市の歴史的記憶 一九世紀後半～二〇世紀前半の日本語表象	

1. 著者名 高綱博文、木田隆文、堀井弘一郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 244
3. 書名 上海の戦後	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 国際シンポジウム 戦前戦中における日本文化人の大陸表象とそのひろがり 絵画・書簡・新聞	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際共同研究シンポジウム 近代日本の中国都市体験(2) 旅行案内・旅順・大連・北京	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	清華大学	北京外国語大学日本学研究センター		
中国	上海外国語大学	清華大学	南京理工大学	他1機関